

太祖様七百回忌大遠忌

R 6. 10. 22

於、加茂法話会

① 曹洞宗の両祖さまは

高祖道元禪師 (建長五年〔一二五三〕八月二十八日示寂 五十四歳)

大本山永平寺ご開山 (正治二年〔一二〇〇〕生) 立教の祖〔宗旨〕 仏法の種まき

太祖瑩山禪師 (正中二年〔一三二五〕八月十五日示寂 六十二歳) 永光寺にて

大本山總持寺ご開山 (文永元年〔一二六四〕生) 開宗の祖〔宗門〕 その種を國中に弘め土台作り

② 「大宋紹定のはじめ、本郷にかえりしすなわち、弘法救生をおもひとせり。なほ重担

をかたにおけるがごとし。しかあるに弘通のこころを放下せん、激揚のときをまつ

ゆゑに」一箇半箇の接得↓瑩山禪師の出生 (『辨道話』)

道元禪師―孤雲懷奘禪師―徹通義介禪師―瑩山禪師―峨山詔碩禪師(一二七六―一三六六)

十三歳得度作僧(最後の弟子) 三十二歳嗣法(最初の弟子)

『瑩山の示誡を受け肇めて永平の的意を得るなり。(中略) 嗚呼、お釈迦様の正しい教えが日本の地に至り赫々たるは、実に道元禪師が傑出の故なり。』

《永平寺承陽殿前に峨山石》

③ 此の世の人を救うべき 良き子をわれに授けよと 母三十七歳(一二六四)の時の子

真心こめて母ぎみは 観音菩薩にいのらるる

道元禪師の弟子 (太祖常濟大師誕生御和讃)

瑩山梯の母は懐(慧) 親大姉、その母の明智優婆夷 このお二人影響大なり

慈母(はは)の遺言護られて 救済(すくい)の誓願たてたもう

(太祖常濟大師影向御和讃)

④ 「願生此娑婆国土し来たれり、見釈迦牟尼佛を喜ばざらんや」

(『修證義』「行持報恩」)

「人界の生は皆是レ器量なり」

(『正法眼蔵隨聞記』五―八の三 ちくま学芸文庫 水野弥穂子訳 316頁)

「まれに人界たんにがいに生れて、たまたま仏法に逢う時、何いかにしても死に行くべき身を、心ばかりに惜しみ持たもつとも叶うべからず。遂すてに捨行く命を、一日片時へんじなりとも仏法のためすてたらば、永劫よちうの楽因なるべし。」(『同書』三一十三 204頁)

⑤ 生 杉山平一

ものをとりに室に入ってきて 何をとりに来たのか忘れて もどることがあるもどる途中でハタと 思い出すことがあるが そのときはすばらしい身体が先にこの世へ出てきてしまったのである その用事は何であったのか いつの日か思い当たることのある人は 幸福である 思い出せぬまま 僕はすごすごあの世へもどる

新潟市秋葉区田家 久昌寺 中野睦宗